

時刻	次第・発言者	発言内容
13:30	<p>＜開会行事＞ 進行(馬場総括)</p> <p>＜開会挨拶＞ 森山課長</p>	<p>開会の言葉</p> <p>「委員の皆様には、ご多用のところ本会議にご出席いただきまして、大変ありがとうございます。大分県教育委員会では現在、生徒指導上の課題やあるいは障がいのある児童生徒の増加等に対応して、学校における多様性を前提とした支援と教育活動を一層進めるといった観点から、包摂性の向上を掲げて取り組みをすすめております。社会教育においても、平成30年度に中教審答申に基づいて、高齢者・障がい者・外国人などの困難を抱える人々などすべての住民が孤立することなく社会参加できるように社会的包摂に寄与することが求められています。</p> <p>文部科学省の委託事業を活用しておこなう「生涯を通じた障がい者の学び支援事業」は、障がいを持つ方が学校を卒業した後に、仲間との交流機会、あるいは様々な学習機会へ参加しやすい環境をととのえるための支援や取組をつくっていく、誰もが障がいの有無にかかわらずともに学べるインクルーシブな学びの場づくりを目指していくものです。障がい者の生涯学習を支えるネットワークの構築を図り、本事業を、行政・民間が連携して効果的に推進するために、この「地域連携コンソーシアム」を立ち上げました。社会教育・特別支援教育・障害者福祉に携わる行政、そして企業・団体といった関係者の皆様がそれぞれの得意分野を生かしながら連携や協働の方策を探っていく、そして本県の実態に応じた展開方策を協議する場にしたいと考えます。</p> <p>本日は3つのねらいがあります。1つ目は、皆様に本事業の内容や趣旨について共通理解をしていただくこと。2つ目は、コンソーシアム委員の間で、それぞれの取組や活動の情報共有する、つまりはお互いを知ること。3つ目は今後に向けて各機関の連携の可能性を探っていくこと。委員の皆様には限られた時間ではありますが、本事業の推進のために忌憚のないご意見をいただきますよう、お願い申し上げます。」</p> <p>参加者紹介 紙面にて紹介</p> <p style="text-align: center;">—協議—</p>
13:40	<p>＜座長選出＞ 進行</p> <p>＜各団体の情報提供＞ コンソーシアム委員</p> <p>岡田座長</p>	<p>座長 岡田教授 副座長 森山課長</p> <p>各団体説明①～⑫ 会議次第 P. 4 参照 (省略)</p> <p>随分取組がある。知らない人、関わっていない人も多い。 コンソーシアムの中で情報共有して、さらに外に情報発信していく必要。</p>

14 : 30	<p>＜特別支援教育関係者より＞</p> <p>衛藤委員 (大分大学)</p>	<p>これまでなかった連携をしたりいろんな人にも関わってもらったりしたい。</p> <p>大分県がこの事業に手を挙げたことについて意義や意味がある。素晴らしい。</p> <p>大分県の障がいのある人の社会教育における課題の1つは、学校教育から社会教育への移行。卒業後に社会教育にいかにもうまくつなげていくか。知的障がい、精神障がい種については他の障がい種に比べてかなり遅れている。特別支援学校の先生方と連携して何らかの対策が取れないか。</p> <p>もうひとつの鍵は、「本人に直接」ということ。保護者や近くの方を通してという体制がほとんど。大人や高等部の生徒達に卒業後に直接的に情報がいつて参加してもらえるような仕組みづくりが鍵になる。「移行」と「直接性」。それぞれの団体の活動について、もっと直接的に知ってもらいたい。そして、新しいリソースも開発していきたい。以上のことが3年間でできれば良い。</p>
	<p>清末委員 (大分支援)</p>	<p>本校では陸上部、パソコン部、音楽部、書道部の4つが活動。卒業後に継続して活動する場が、こんなにあると私自身も知らなかった。情報が伝わっていないところがある。卒業後に子ども達が止まってしまっている。施設は余暇活動があるが、一般就労は途切れる。卒業後も陸上部員を受入れて練習しているが、どうしても16時くらいに終わるので仕事の時間と合わない。</p> <p>本年度の卒業生が全国障害者スポーツ大会に出場できるようになったが、どうやって練習しているのか聞くと、本校職員が毎週土曜日に別府競技場を借りて卒業した子ども達を集めて練習している。卒業したあと練習ができる場をどう確保していくか、さらに継続して取り組めるものができればいいと思う。</p>
	<p>後藤委員 (大分大学教育学部附属特別支援)</p>	<p>学校では卒業後の生活を豊かにしてほしいと色々なことに取り組んでいる。最近子ども達が友達と誘い合ってアミュープラザで遊ぶなどができるようになった。学校でも社会とつなごう、出かけていこう、自分たちから動こうと。ホルトのプールやボーリング場、芸術文化支援センターの派遣事業等、生活を考えてお金のかからないものに取り組んでいる。最初に利用する施設に電話すると必ず「大丈夫ですか?」と聞かれる。2, 3回目になると大丈夫だと実感してもらえる。理解・啓発が進んできたのもっともっと広がってけると子ども達が社会につながって生きていけるのではと思う。</p>
	<p>岡田座長</p>	<p>支援学校を卒業した後に急に学習機会が減っている現状について、具体的な姿が分かった。また、分かていないと受入れてもらえないということも改めてわかった。事業は3年間だが、そのことでモデルやつながり、ネットワークと一緒に連携ができ仕掛けや仕組みができてくる、後に残る取組になれば良いと思う。</p>
	<p>＜事業の概要と先進県の取組＞</p> <p>事務局</p>	<p>1. 事業概要について P6～7 説明</p> <p>2. 秋田と宮崎の取組について</p>

14 : 40	<p>＜コンソーシアム・普及・啓発について＞ 事務局</p>	<p>(質問無し)</p> <p>3. コンソーシアムの普及について説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページ「まなびの広場おおいた」について</li> <li>・リーフレットの紹介</li> <li>・九州・沖縄ブロックコンファレンスについて</li> </ul>
	<p>池部委員 (太陽の家)</p>	<p>生涯にわたって勉強していく場が大切。個人的には障がい者のための場をつくるというよりは、今あるものになぜ障がい者の方が行けないのというところを突き詰めてみていかないといけない。大分市の公民館の調査をぜひ全県でやってほしい。公民館で障がいのある方を受入れる体制になっていますか？と。今ある学びの場に障がいのある方が何の気兼ねもなく行けるようになるというのができればそれで解決。</p> <p>そうは言っても障がいのある方の持つ課題に関する研修は別途作べき。そこを分けていかないと、どこに向かっていくのかがぼやける。</p> <p>また、情報が得られにくいのが一番の問題。いかに当事者が得られるようにするか。「まなびの広場」のページに今日参加した団体のリンク先をはり、直近のイベントが分かるように。自立支援センターのような、大分県共通のピクトグラムをつくって、「この講習会は車いすトイレがある」「手話通訳がいる」など、共通のシンボルマークを作り、県内のイベントに必ずこれを載せなさいというぐらいにする方が、直近的な解決につながっていく。HPやアプリ（イベント情報が届く）など工夫していけたら良い。</p> <p>公民館職員対象の研修も、何を伝えるかが重要。インクルーシブを目指すのではなく、エクスクルージョンしない、つまり疎外しない、外さないというイメージ。障がい者に、今ある学びの場に来てくださいではなく、そもそも障がいのある方を除外しない企画をしましょうという考え方を持ってもらったほうが良いのかと思う。公民館の職員にどういうメッセージを伝えるのかはとても大事。十分検討して進めるとよい。</p>
	<p>岡田座長</p>	<p>障がいのある方向けに特別に「閉じた」ものをつくるのではなく、障がいのある方も普通に参加できるというところをどうやっていくか。情報についてどうやって増やしていくか検討する必要がある。</p>
	<p>横山センター長</p>	<p>「まなびの広場」に当センターの名前が入ってもいい。芸術文化活動を楽しむことができる環境・体制を整えるためにいろんなところ、人、機関とつながっていくことを行っている。施設や公民館などいろんな学びの場がつながることを考えると、アートのところではイベントややりたいことがあるときの施設紹介などの情報が出てくるといいのかなと思います。</p> <p>公民館の取組でうちを利用してもらおうということもある。</p>
	<p>岡田座長</p>	<p>利用者の視点から見たら、地区ごとのイベントが分かった方が良い。</p>

麻生主宰	<p>「学び」と「教育」を並べた時に、卒業した方が、「また学ぶの？」という気持ちにならないだろうか。「卒業したら何をしたいか」「した方が良いよ」ということを学校教育の中で教えてもらわないと、継続的にならない。「移行する」のであれば、卒業の事前段階に、授業などで「卒業しても、皆さんは、何かを続けることによって生活が豊かになっていく」ということを伝える。「学び」「教育」は私たちがおさえておくことであって、パンフレットに「学び」と入れると「もう学ばなくて良い」人が出てきそう。とっつきやすい言葉を考えてもらいたい。</p>
事務局	<p>仲間と交流して行う、スポーツやアートといった人生を豊かにしてくれるものとして総括的に「学び」という言葉を使っている。ただ前面に出しすぎると堅くなるので、参考にさせていただく。</p>
岡田座長	<p>「教育」が前に出ると良くない。「学び」は自分にとって意味のあるもの、興味の持てるものを含めたひろいところでどう選んでいくかという感じだと分かっていたように、「学び」という言葉といろんな機会が結びつくようにやっていく必要がある。支援学校在学中に触れていただいて認識を柔らかくすると良い。</p>
麻生主宰	<p>今まで自分たちがやってきたもの。自分なすきなものをこれからもできるよ、続けられるし変えても良いよ、というもっていき方がいい。</p>
岡田座長	<p>裏方があれこれ発想してしかける必要。</p>
関委員	<p>卒業後の情報がうまく伝わっていない。ここにいるのは場を提供する側の人間。当事者目線でいったときに、よくありがちなのが同じ日にイベントが重なる。伝え方は団体先のリンクよりどの日に何があるかという、利用者目線の検索・情報発信 何を、いつ、どこでやっているという解きほぐし方をすることで「まなびの広場おおいた」が生きるのでは。愛称として別の名前を付けるなどすると良いのでは。</p>
岡田座長	<p>「利用者目線」が大切。</p>
<p>&lt;調査研究について&gt; 事務局</p>	<p>アンケートについて 調査項目 具体的な文言については後ほどメールで提案</p>
衛藤委員	<p>可能であれば、各特別支援学校の同窓会について知りたい。 実施できているところ。学校の中での位置づけ。 特別支援学校の卒業生が再び学校に来るような機会がどれくらいあるのか、という調査ができると、学校を卒業した後に直接的に連絡できる、これが重要。 本人達に直接的に情報を届ける。</p>

		<p>こちらから、もっと積極的に情報発信していきたい。そういう仕組みをつくるのに一番可能性があるのは、特別支援学校卒業生、手をつなぐ育成会の方、そういうところ。</p>
横山委員		<p>アンケートを実施するにあたり R2 に県の「障がい者芸術文化基本計画」が出されて、そのときに福祉事業所等にアンケートをしている。</p> <p>結果でている。それとからめて見ていく必要がある。</p>
衛藤教授		<p>太陽の家で「社会リハビリテーション」として福祉関係が中心となってこれまで行われてきた取組がある。今回は教育委員会が社会教育としてやっていく。これってどこがどう違うのか？実質的な違いを整理していく必要があると思う。先ほど横山委員がおっしゃった令和2年度の調査と同じ点、違う点を対象も含めて整理していくべきだ。</p>
佐藤委員		<p>性別があるのはなぜ？</p>
事務局		<p>性別については「答えない」という項目もつくる予定。</p> <p>やりたいことについて男女の差をみたいということもあったが、取る方向も考えていきたい。</p> <p>衛藤委員の質問について、文科省が始めたことと、福祉分野の住み分けとしては「卒業後の学び」の場を、社会教育施設で創り出していけないかということ。あとは今まである実践についての情報を一元化してHPで届けるような仕組みをつくる。ゼロから新しいのをつくるのではなく今までの取組に加えて公民館や社会教育施設、大学で始めたいということを考えている。</p>
永尾委員		<p>別府市公民館で高齢者対象に講座を取り組んできた。成人に対するものがなかなかできていない。「学び」を望まないこともあるという意見もあるが、私自身は学びは楽しいもの、学ぶことで地域の困りごと・解決したいことについて皆の意見を持ち寄ることによってつなげていけるものだと考えている。</p> <p>障がいがある方々の意見や考えが、この事業をすることで叶っていくのではと期待している。どこを目指しているのかを具体的に皆さんとお話しする時間があると良い。スポーツやアートには別府も取り組んでおり、高齢者の方も生きがいとして喜んでいただいているが、地域の困りごとの解決はできてないと気づいた。</p>
岡田座長		<p>押しつけられてやらされるものではない部分で学習の入口として入る。</p> <p>自分のニーズから入って行っていたら実はそれが地域の課題や他の人の暮らしとかいろんなものに中ではつながっていき、社会的な必要のあるものにもつながるんだなあ実感してもらえるような仕組み、魅力的な講座を創っていくのが提供する側の課題。スポーツ・芸術も含めてつめていければと思う。</p>

